

米米警察殺人課

ハードボイルドSFミステリー

都筑道夫



徳間書店

未来警察殺人課

昭和五十四年四月十日 第一刷

定価は帯・カバーに表示しております

著者 都 筑 道 夫

発行者 徳 間 康 快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(43)六二三一番(代表)
振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの書店にてお取り替えます)

〈編集担当 久保寺 進〉

未来警察殺人課〇目次

人間狩り

7

死霊剥製師

35

空中庭園

65

料理長<sup>シ
エ
フ</sup>ギロチン

95

ジャック・ザ・ストリップー

121

氷島伝説

149

カジノ鷺の爪

181

あとがき

219

未来警察殺人課〇都筑道夫

本文扉
カット
装釘
秋山
山野
辺進
育

人間狩り



I

おれは拳骨を、相手の顔にめりこみました。鼻柱をくじいて、顔じゅうをぬるぬるの血だらけにして、次には腹に拳固をたたきこむ。かたい腹が、挽肉のように柔らかくなるまで殴って、地べたにのたうちまわらしたかった。血といっしょに、折れた歯を吐きだして、ゆっくり死んでゆくのを、眺めたかった。

だが、相手は銃を持っていた。睡眠銃でも、衝撃銃でもない。狩猟用の殺傷銃だった。われわれの祖先が、太陽系

の第三惑星を、地球と呼んで住んでいたところに、武器としてポピュラーだった拳銃に似ている。博物館にいったら、現在の地球に最初に移住してきた連中の遺品を見るたびに、おれは思うのだけれど、どうして人間というやつはいつまでも、過去のかたちにこだわるのだろうか。住居にしても、衣服にしても、道具にしても。

それはとにかく、いかつい銃口をむけられては、楽しんではいられない。相手がカバンから、銃をとりだしたとたん、おれは三課の刑事専用の強力衝撃銃を発射していた。右腕の内がわにつけたホルスターから、衝撃銃をとびださせる。それをつかんだ右手を、まっすぐ相手の心臓にむけてのばす。スイッチを押すの三動作が、相手の銃をかまえて

る動きより、早いという自信はあった。

相手は銃を落して、からだをふたつに折りまげながら、他愛なく倒れた。おれは右手首をふって、衝撃銃をホルスターにもどしながら、走りよった。相手は三十五、六の白人で、地味なビジネス・スーツを着ている。銃をとりだしたときに、地面に投げだしたカバンが、そばに口をあけていた。おれは走りよると、まず殺傷銃をひろいあげて、安全装置をかけてから、カバンのなかに抛りこんだ。次に男のポケットをさぐる。ポケットのなかには、なにもなかった。身分証明書はもちろん、金も持っていない。カバンのなかにも、銃のほかには、なにも入っていないかった。そのカバンを右手にさげると、自分のスーツケースは左手に、おれはナイロビ空港の正面玄関へもどっていった。

ケニア警察の三課は、ちゃんとナイロビ警察署のなかにある。おれのところのように銀座のレストランの奥とか、ニューヨークみたいにポルノ・ショップの奥にあるよりは、やはり刑事としては気持がいい。空港でひろったタクシーを、警察署の前でとめると、おれは胸をはって、ビルの玄関へ入っていった。受付には、体格のいい制服巡査が、胸の金ボタンをはじきとばしそうな恰好で、腰をおろしてい

た。おれはカバンとスーツケースを床において、左手首の腕時計をはずした。

「ぼくは星野という日本人の旅行者ですが、前の公園で、これをひろったんです。拾得物係の部屋は、どこでしょう？」

おれがさしだした時計を、受付の巡査はじろりと眺めてから、大きな黒い手でつまみあげた。

「公園でひろったんなら、ここがいい。たしかに預かった。ご苦労さん」

「拾得物係の部屋を聞いてるんですがね、ぼくは」

辛抱よく、おれはくりかえした。受付はうるさそうに、「署のまわりの拾得物は、ここで預かることになってるんだ。あんたは旅行者で知らないだろうが」

「日本人の旅行者だよ」

「それが、どうした。日本とアフリカは違うんだよ。その風邪ひきのしょんべんみたいな黄いろい顔を、いつまでもそこへ置いておくと、公務執行妨害で逮捕するぞ」

かっとしたが、左右の廊下と背後のドアを見まわすだけの余裕は、おれにもまだあった。いい塩梅に、だれもない。おれはいきなり右手をのばして、受付巡査の太い喉を

つかんだ。

「このでくの坊、その時計を見たことがないのか。さつきと拾得物係の部屋を教えろ」

おれの剣幕で、やつはようやく、特別通達を思い出したらしい。黒い顔をふくれあがらしたまま、腕時計を握った手で、左のほうをさししめしてから、指を三本、立てて見せた。おれは時計をとりもどして、ポケットにほうりこむと、スーツケースとカバンをさげて、左の廊下へ行きかけながら、

「勤務成績に影響しても、おれを怨むなよ。風邪ひきのしよんべんが、余計だった」

受付巡査は黙って、喉をなでていた。左の廊下の三番目の部屋では、まったく応対がちがっていた。若い巡査が時計をうけとると、わきのドアへ入っていったが、すぐ出てきたときには、愛想のいい笑顔になっていて、

「遠いところをご苦労さまでした、星野さん。どうぞ、こちらへ」

わきのドアのなかは、ファイル・キャビネットが並んでいるだけの殺風景な小部屋だったが、おれが入って、笑顔の巡査が出ていくとすぐ、奥の壁が横にすべった。居心地

のよきそうな事務室で、おれを出迎えたのは、意外なことに若い女だった。

「あなたが三課の課長さん？」

カバンとスーツケースを床において、おれが聞くと、女は無言で、腕時計を返してよこした。肉眼では見えない身分証明書が、ガラス蓋に刻んである腕時計だ。おれがそいつを左手首に巻きつけていると、女は落着いた口調で、

「ケニア警察三課ナイロビ支部長のエリノア・ローズベルト・ホイットニーです。旅はいかがでした、星野さん」

「ナイロビへついてからが、大変でしたよ。空港では殺されかけたし、この受付では時計をねこばされかけた。

玄関の大男は、まだ声が出ないでしょう」

エリノア・R・ホイットニーは苦笑しながら、デスクのむこうに腰をおろした。黒い笑顔が、すこぶる女らしい。

大きなデスクの上に、おれはカバンをのせて、

「こいつを調べてください。殺傷銃が入っている。空港ビルと隣りの航空会社のあいだの露地の奥で、心臓発作を起して死んでいる男の調査も、お願いしたいな。三十代の白人ですよ。もうだれかが発見して、届けているだろうが……」

「あなたがやったの、その男」

エリノアは、うらやましそうな顔をした。おれはカバンをひらいて傾けて、なかの銃を見せながら、

「こいつを突きつけられたんだから、しようがないでしょう。ここじゃあ、珍しくもないかも知れないが、日本じゃ生涯、実物を見ないで死んじまうひとが多いしろものだ」「なぜ突きつけられたか、心あたりはあるの?」

「それがないから、腹が立つんだ。ぼくが出張してきたのは、たかだか殺人を犯す可能性のある男を、探しにきたにすぎない。そいつは日本じゃ、社会的な地位のある男だから、医者の診断書をとって、このケニアに狩猟にきた。それで、危険のない人物になって帰ってくるだろう、と思って、こっちは——いや、ぼくはあきらめていたんです。ところが、おたくから、水沢友造が行方不明になった、という通報があった。そこで、東京の三課から、ぼくが派遣されたというわけだ。ナイロビはもちろん、ケニアに来たのは今度がはじめて、狙われるおぼえは、まったくない」「ほんとに、あなたが狙われたのかしら。つまり、星野刑事という特定の人物が目的じゃなくて、金のありそうな旅行者が狙われたんじゃない?」

「ナイロビは、そんなに物騒なんですか。くだいようだが、

こいつは衝撃銃じゃない。狩猟用の殺傷銃だ」

「ここは本格的な狩猟のできる世界唯一の国だから、たしかに危険人物は多いわ。だから、わたしたちの仕事も、やりがいがあるの」

と、エリノアは微笑した。おれたち三課の刑事にだけ、意味のわかる微笑だった。いや、精神病医にもわかるかも知れない。

「でも、そうね。殺傷銃でどれかれかまわず、つけねらうような危険人物がいたら、とうにわたしが処分しているわ。やっぱり、あなたと知って、狙ったんでしょうね」

「そうにきまつてる。ぼくが入国手続をしていたときに、そばにいたんだ。つけているのは、すぐにわかった」

「あなた、テレパシスト?」

「テレパシーの持主なら、こんなに考えこみはしないよ。勘でわかったんだ。だから、ひと気のない露地にさそいむと、案の定、こいつをひらいて、銃をとりだしやあがった」

と、おれはカバンをたたいた。エリノアは目を細めて、「相手が銃を——それも、殺傷銃をかまえてから、しとめた」とすると、あなた、いい腕らしいわね。だから、派遣さ

れたんでしょけれど」

II

世界のほとんどのの人にとって、警察とは交通渋滞を解消してくれる便利な存在でしかないだろう。三課すなわち殺人課が、警察機構のなかにあることを知っているのは、関係者だけに過ぎられている。

たとえば日本では、この三十年間、殺人事件は一件も起っていない。殺人がなければ、警察に殺人課も必要がないわけで、おもてむきには、二十五年前に廃止された。だが、人間がまったく、殺意を持たなくなったわけではない。なかにはおれのように、一種の先祖がえりだろう、異常な殺人願望の持主も生れてくる。けれども、発達した医療機構を、完全にコントロールしているコンピューターとテレパシストによって、殺意は事前に発見される。精密な状況分析がおこなわれて、最悪の場合、殺意をいだいた人間は、処分されてしまう。そのために設置されたのが警察三課で、

とうに廃止されたはずの死刑を、ひそかに執行する課——つまり、殺人をあつかう課ではなく、殺人をおこなう課なのである。

潜在異常性格者が発見されると、たとえばおれは、衝動をはじめて実行に移そうとしたときに、逮捕された。特別な医療機関に送りこまれて、軽症ならば矯正される。おれの場合、矯正不能の重症で、これは死を意味していた。しかし、同時に、特殊な才能あり、とも判定されたおかげで、おれは生きがいを見いだした。強制的に手術をされて、訓練機関に送られて、三課の刑事になったのだ。手術はおれたちの性癖をコントロールするためのもので、あたえられた任務を逸脱した行為があった、と判断されたとき、あるいは上司に反抗したときには、体内に埋めこまれた装置が働く。どこにあるのか知らないが、コントロール・ルームで、おれの番号を刻んだボタンが押されると、一巻のおわり。おれはショック死してしまうのだ。けれども、なまじつかの矯正をうけて、腑ぬけのような生活を送るよりも、いまの状態のほうが、どれだけ増しかわからない。

こんどの任務の目標、水沢友造のように、金も地位もある場合には、当人が楽しみながら、問題を解決できる。水

沢は年来の友人が、妻の愛人だったことに気がついて、殺意をいだきはじめたのだけれど、主治医がいちはやく察知して、手を打ったのだ。水沢は二カ月前、生きものをほんとうに殺す狩猟をしに、単身、ケニアに旅立った。代償行為にあきて、日本へ帰ってくるころには、殺意は雲散霧消して、細君と離婚するか、和解するかはとにかく、問題は解決しているはずだった。

ところが、一昨日、ケニア警察の三課から、東京三課へ連絡があった。水沢友造が投宿ちゅうのナイロビのホテルへ、もう五日間、帰ってこない、二課が捜査をしたが、行方が知れない、という通報だった。そこで、おれが飛んできたというわけなのだ。

協力要請の訪問をおえて、警察署を出ると、予約のしてあるヌアクム・ホテルへ入った。ヌアクムというのは、この星を第二の地球としたわれわれの祖先が、故郷忘じがたく、ここをケニアのナイロビとさだめるより以前の地名で、大きな平らな場所という意味の、いまは亡びさった先住民の言葉だそう。おれは平らで柔らかな場所が恋しかったので、腕時計の目ざましを一時間後の午後七時にセットすると、ベッドに飛びこんだ。急にこんどの出張がきまった

ために、遂行ちゅうだった任務を無理して片づけたので、おれはひどい寝不足の状態だった。こういうときには、一時間でも寝るにかぎる。

腹もへっていたので、予定どおりに目がさめた。一階のグリルへおりて行くつもりで、身仕度をととのえていると、フロントから電話があつて、ロビーに客がきているという。エリノアが、刑事をひとりつけてくれるといっていたから、それが訪ねてきたのだろう。

おりていってみると、客はエリノア・ローズベルト・ホイットニー自身だった。それも、さっきとは別人のようなエリノアだった。ふくらんだ胸とくびれた腰が、やたらに目立つ銀いろのドレスを着て、目蓋とくちびるも、銀いろに塗っている。黒い肌がつややかに光って、おれは目がくらみそうだった。

「おどろいたな。支部長じきじきに、ご案内してくださいる気じゃあ、ないでしょうね」

おれがいうと、エリノアはにっこり笑った。ロビーにいてある鉢植えの巨大な蘭の花が、しおれてしまうのではないか、と思ったほど、華やかな笑顔だった。

「いけないかしら。あなたにあうまでは、部下に担当させ